【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2411E

中期計画の項目	2－(4)－①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1) 2-(4)-②-3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 1)国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。 ②調査研究成果の発信 3)ウェブサイトの充実
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（研究員）、安岡みのり（研究補佐員）、藤井糸子（研究補佐員）、横尾千穂（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

3年度はこれまでに構築してきた文化財情報基盤を利用しつつ、文化財情報の文化財保護への活用という視点からの調査研究及びデータベースの構築、文化財情報の利用及び発信のための一層の環境整備を実施した。

○調査研究及び成果公開

・文化財情報の収集、データベース構築やその活用に関連する調査研究を実施、論文や学会発表を通じて成果を公表した。併せて、プロジェクト「文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究」と連携し、光学調査の成果発信として東京国立博物館所蔵平安仏画ウェブコンテンツを4年3月31日に公開した。

・同上のプロジェクトと連携し9月21日には「文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」」を東京文化財研究所で開催、59人が参加した。また、4年度上半期開催予定の同セミナーでの講演を予定する博物館・資料館職員との事前協議を4年2月16日にオンライン開催した。

○情報蓄積・発信機能の強化

・「総合検索」として横断検索が可能なウェブデータベースを中心に、既存データベースへのデータ追加や機能改善を実施した。また、文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携し、データベース管理システムOracleによる所内データベースを適宜改良して利便性を向上させた。さらに、ソーシャルメディアによる情報発信を適宜実施した。

○ネットワーク環境の整備・充実

・これまで個別の物理サーバで運用されていたウェブサーバ等を仮想化基盤上に集約し、バックアップサーバの導入を行うなどネットワークの安定運用に努めた。また、テレワーク環境整備の一環としてウイルス対策ソフトをクラウド化した。

・各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を行い、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換しセキュリティ水準の維持向上に努めた。また、個別認証の強化を目的にActiveDirectoryサーバを構築した。

年度計画評価	B

【評定理由】

①適時性においては、データベース構築・運用、高精細画像を主とした文化財のウェブコンテンツ公開は、我が国の文化財に関するオンラインでの情報発信として時宜に適ったものである。②独創性においては、ウェブデータベースはWordPressにより職員が開発した多様なデータベースの速やかな公開が可能なもので、ウェブコンテンツは最大で長辺96000ピクセルの超高精細画像を自由に拡大表示可能で、蛍光X線分析データの特徴と分析箇所のマクロ画像を連携して表示し、また全分析データの画面上でのソート、検索を可能とするなど独創性が高い。③発展性においては、横断検索可能で、データベースの相互連携も図られ、一層の発展が期待できる。④効率性においては、データベースやウェブコンテンツ構築を主に職員が実施することで業務を効率的に遂行できた。⑤継続性においては、ウェブサイトよる情報発信、セキュリティ水準向上への対応も継続的に実施した。よって、新型コロナウイルスの影響により一部計画変更も生じているものの、所期の計画のとおり、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
文化財に関するデータベースのアクセス件数：2,679,886件	①（実績値）データベースのアクセス件数　2,929,768件 ②（参考値）データベースのデータ件数 1,718,006件 ③（参考値）論文　1件 ④（参考値）発表　3件	B

③小山田智寛「『日本美術年鑑』所載物故者記事データベースの活用について　人名による検索と関連データの表示について」『デジタルアーカイブ学会誌』2021年5巻2号、pp.168-171、12月

④二神葉子「世界遺産条約の履行に関する最近の国内外の動向」令和3年度第6回文化財情報資料部研究会、11月30日　他2件

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報デー タベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行 い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に 関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の目標を達成できている。引き続き、文化財情報の文化財保護への活用に関する研究を行うとともに、横断検索が可能な文化財情報に関するデータベースを構築、運用し、研究の実施・成果発信のための情報システムの整備を実施する。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2411F

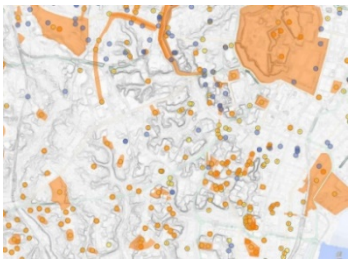
中期計画の項目	(4)-①-1)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 1)国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）、Yanase, Peter（文化財情報研究室ｱｿｼｴｲﾄﾌｪﾛｰ）、呉 修喆（文化財情報研究室ｱｿｼｴｲﾄﾌｪﾛｰ）、扈 素妍（文化財情報研究室ｱｿｼｴｲﾄﾌｪﾛｰ）	

【年度実績と成果】

○文化財情報データベースの充実として、従来より進めている報告書抄録、報告書の各データベースに関して、データを入力・更新した。公開データベースを更新した。

○全国遺跡報告総覧の登録データ件数（括弧内は前年度件数）
PDF 数　31,089 件(27,761)、書誌登録数　113,050 件(88,067)、
遺跡抄録件数　139,393 件(135,663)

○全国の博物館等の文化財関係機関が作成している紀要論文等の情報を集約した「文化財論文ナビ」・「文化財総覧 WebGIS」を公開した。それぞれの既存の文化財報告書・文化財イベント・文化財動画・文化財論文と類似度を自動算出しており、関連コンテンツを自動提示できるようになった。文化財総覧 WebGIS は、全国 61 万件の文化財データを検索できる。



文化財総覧 WebGIS

年度計画評価	A

【評定理由】

①適時性においては、最新のデータを提供して充実を図っている。国民から活発に利用され、文化財情報のインフラとして機能している。7 月に文化財総覧 WebGIS を公開した。全国の文化財に関するデータ 約 61 万件 をインターネット地図で閲覧できる。公開時は多数のメディアで取り上げられた。②独創性においては、全国遺跡報告総覧のように他に類を見ないデータを提供しており、独自のデータ解析も提供している。③発展性においては、既存のデータベースの内容を着実に充実させているとともに、データベースの機能強化を実現している。全国の自治体や博物館など既に 1,335 機関が本事業に参加している。④効率性においては、自動入力チェック機能を実装し効率性を常に改善している。データ基盤の統合によって経済性・保守性を向上させた。⑤継続性においては、大規模なデータベースを維持し、確実なデータ提供を多年に渡って実現している。定量的評価の観点においては、目標値を下回ってしまったものの、上記のとおり、内容豊かなデータベースとして著しく発展していることから、計画を上回る成果を出していると判断し、全体の評定をＡとした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
・文化財に関するデータベースのアクセス件数 11,612,614 件	（実績値）（括弧内は前年度件数） 文化財に関するデータベースのアクセス件数 9,419,564 件（14,183,774 件） （参考値）（括弧内は前年度件数） 公開データベースの件数 27（30） 「文化財総覧 WebGIS」を新たに公開した。 全国遺跡報告総覧　登録データ件数：284,928 件(252, 410 件) 年間ダウンロード件数 1,971,911 件（2,320,607 件） 年間ページ閲覧数 99,974,779 件（78,707,144 件） 論文発表 20 件（ア）　口頭発表 8 件（イ）	C

ア論文 高田祐一「The Production, Preservation and Dissemination of Archaeological Data in Japan 」他 19 件
イ研究発表 高田祐一「60 万を超える地物の属性検索・描画に対応した文化財総覧 WebGIS の開発 」他 7 件

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	中期計画期間の初年度である 3 年度は、データベースを拡充するだけでなく、データ基盤の統合によって経済面及びセキュリティ面からもデータベースの質を向上させることができ、計画的な文化財情報基盤の整備を行うことができた。アクセス件数については目標値を下回ってしまったものの、「文化財総覧 WebGIS」を公開し、多数メディアでも紹介されたことから、今後広く公開データベースが活用されることが見込まれる。以上より、当初想定以上に中期計画を達成することができていると言える。4 年度以降も引き続き、多方面から整備を行い、ユーザーの利便性向上を進める。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2412F

中期計画の項目	(4)-①-2)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-2)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 2)文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管及び公開活用に関して、技術面・法律面含めたガイドラインを作成する。
プロジェクト名称	文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）、絹川桂（文化財情報係主任）	

【年度実績と成果】

○データ長期保管

・災害が多発する日本において、データの安定的な長期保管は課題である。特に津波等においては、サーバなどの機器が消失する場合があり、バックアップが重要である。また災害時でも可用性を高めるためには、ストレージのクラウド化が有効である。当研究所では、3年度にクラウドストレージを導入し、文化財データの長期保管の実践に向けた基盤構築に着手した。

○公開活用に関する法律研究

・研究報告第34冊『文化財と著作権』他を刊行した。文化財の利活用において、特にデジタル化の際には著作権について、課題整理が難しい場合が多い。原因は現場担当者では著作権への対応がわからないためである。そのため。問題となりうる著作権について専門家と課題整理を行い、整理した結果を取りまとめたものとなっている。当研究所研究員、弁護士、大学の法学部教授と作成し、リーガルチェックを経ているため、今後の実践的なガイドとして有用である。

年度計画評価	A

【評定理由】

①適時性においては、災害が多発する昨今の状況を鑑みて至急必要な実践研究である。②独創性においては、全国的な課題に取り組む当研究所ならではの研究であり、代表的な研究成果は全国に適用できる。③発展性においては、文化財データの長期保管や法律面の課題は、日本全国あるいは世界共通の課題となっており、実践を深めていくことで、国内外に大きな影響を与えることができる。④効率性においては、本研究成果は、文化財防災センターにも適用できるものであり、スケールメリットによって効率化できている。⑤継続性においては、文化財情報係図書担当と連携し、4年度以降も継続して事業を継続するための基礎を確立できた。以上のように、当初計画以上の成果を上げていることからＡ評価とする。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） 報告書刊行数：2件（ア、イ）	定量評価 —

（ア）奈良文化財研究所研究報告第34冊『文化財と著作権』(3月)

（イ）研究報告第31冊『考古学・文化財デジタルデータのGuides to Good Practice』

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	中期計画の初年度である3年度は、データ長期保管、公開活用に関する法律研究それぞれが持つ課題を整理し、解決するための基礎を構築することができた。特に公開活用に関する法律研究については、実践的なガイドとして研究報告を刊行するなど、中期計画初年度としては想定した以上の成果を上げることができており、4年度以降も継続して成果を上げることが期待できる。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2413E

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①3)・4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。3)調査研究及び文化財防災に役立つデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。4)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（主任研究員）、安永拓世（主任研究員）、米沢玲（研究員）、小山田智寛（研究員）、寺﨑直子（研究補佐員）、尾野田純衣（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○全所的な文化財情報の発信：副所長を委員長とするアーカイブ WG を例年通り 4 回（4 月 21 日、9 月 27 日、12 月 23 日、3 月 23 日）開催し、アーカイブの拡充と積極的に情報発信を行うための協議を行った。

○当研究所が所蔵する昭和 30 年代の文化財調査写真を利用し、現代の画像技術を応用して、現在損傷を受けてしまっている、与謝蕪村筆「寒山拾得図襖絵」の復原を、所蔵者の妙法寺（香川県丸亀市）と共同研究として開始した。調査撮影を行い、その成果の一部を口頭にて発表した。(11 月 5 日)

○文化財防災への活用も見据えて、文化財の情報収集、データベース入力、売立目録デジタルアーカイブの改良を行い、文化財アーカイブ機能を更新したほか、「展覧会における新型コロナウイルスの影響データベース」を作成、公開した。

○当研究所が所蔵する田中一松資料の調査ノートについて、オンラインによるシンポジウムを開催し、成果公開を行った。(1 月 8 日)

丸亀・妙法寺での調査の様子

○資料閲覧室の運営・管理 資料受け入れ数：感染症防止対策のため 2 年度に引き続き事前予約制により、週 1 回（11 月からは週 2 回）開室した。図書等の受け入れ和漢書 947 件、洋書 138 件、展覧会図録・報告書等 849 件、雑誌 2,465 件（合計 4,399 件）・閲覧室利用状況：公開日総数 69 日・年間利用者合計 570 人

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、オープンアクセス資料をさらに増加したほか、「展覧会における新型コロナウイルスの影響データベース」(1,400 件）を作成、ウェブ公開した点を高く評価した。②独創性においては、当研究所が所蔵する蕪村筆「寒山拾得図」の調査写真を活用し、最先端の画像形成技術を応用して独創的な共同研究を進めた点を高く評価した。③発展性においては、国内外の関係機関と連携して、予定を上回る成果公開を行い、発展的な取り組みを推進できた。④効率性においては、元年度より導入した図書館システムを活用し、図書等の入力作業と情報発信を効率よく行った。⑤継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化作業をコロナ禍の中、継続でき、質的な向上を達成できた。アーカイブ WG とも連動して、専門性・独自性の高い研究アーカイブの構築と活用を戦略的に推進した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	A

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・学会・研究会等発表　2 件（ア・ウ）　・報告　1 件（イ）	定量評価
		—

ア　安永拓世「香川・妙法寺の与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」―画像資料を活用した復原的研究―」第 55 回オープンレクチャー、東京文化財研究所、11 月 5 日

イ　安永拓世「東京文化財研究所の写真資料から浮かび上がる与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」」『Tobunken News』 76、12 月

ウ　江村知子「田中一松資料にみるコレクション形成の足跡―個人コレクターとの親交」オンライン・シンポジウム「日本美術の記録と評価―美術史家の調査ノート」4 年 1 月 8 日

中期計画評価	A

中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	オンラインを活用して 公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。中期計画初年度として、当研究所が行う文化財の調査研究とその成果を集約しつつ、データベースの継続的拡充を行い、専門的アーカイブと総合的レファレンスの充実を推進したことにより、当初の目標を上回る成果をあげることができている。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2414F

中期計画の項目	2-(4)-①-4)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 4)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○井関信雄（連携推進課長）、渡 勝弥（文化財情報係員）、伊藤久美（事務補佐員）、山内章子（事務補佐員）、中西晶子（事務補佐員）、堀内千嘉（事務補佐員）、永岡美和（事務補佐員）、高原洋子（事務補佐員）志賀明美（事務補佐員）	

【年度実績と成果】

○資料の収集・整理・保管・提供

・収集・整理・保管については、例年どおり滞りなく実施した。提供については、2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底した。資料室の予約フォームの利便性の向上について検討を行った。

購入図書	407 冊
寄贈図書	7,052 冊
雑誌	3,381 冊
一般利用者	217 人
利用冊数	2,536 冊
来館者複写件数	233 件
遠隔利用：複写受付件数	559 件
貸借貸出冊数	167 冊

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、2年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止対策を継続して実施しつつ、閲覧可能な体制の維持に努めた。②発展性においては、利用状況カレンダーをより見やすく、修正・変更の利便性が高いGoogleカレンダーを採用することにより、利便性の向上を図った。③効率性においては、2年度導入した資料室の予約フォームのマニュアル作成に着手する等、より一層の利便性向上に取り組んだ。④継続性においては、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の緩和などにより、2年度と比較して利用者へのサービス提供が向上しており、予約無しで来室した利用者にも対応することができた。以上の観点から本事業は順調に推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	A	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	（参考値） ・資料閲覧室・図書資料室の開室日数　209 日 ・資料閲覧室・図書資料室の利用者数　217 人 ・文化財に関する資料・図書等の総件数　501,888 件	－

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	中期計画に掲げた目標の一つである資料の収集において、調査・研究のための二次資料の収集は予算削減等の理由により困難をきたしているものの、各自治体が発行する調査報告書は従来どおりに収集・整理・保管・提供を行うことができた。その他の目標については、本中期計画通りの安定した滑り出しを見せており、3年度は中期計画の初年度として十分な成果を得たといえる。4年度以降も文化財に関するアーカイブの拡充を継続的に行っていく。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2421E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1)定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』　・『東京文化財研究所概要』　・『東文研ニュース』　・『美術研究』(年 3 冊) ・『日本美術年鑑』　・『無形文化遺産研究報告』　・『無形民俗文化財研究協議会報告書』　・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○齊藤孝正（所長）	

【年度実績と成果】
・『東京文化財研究所年報』2020 年度版
・『東京文化財研究所概要』2021 年度版
・『東文研ニュース』年 3 回（74～76 号）
・『美術研究』(434 号)（8 月）
・『美術研究』(435 号)（12 月）
・『美術研究』(436 号)（4 年 3 月）
・『令和元年版　日本美術年鑑』(5 月)
・『無形文化遺産部研究報告』15 号（4 年 3 月）
・『第 15 回無形民俗文化財研究協議会報告書』(4 年 3 月)
・『保存科学』61 号（4 年 3 月）

保存科学第 61 号の表紙

年度計画評価	B

【評定理由】
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、『美術研究』で論文翻訳により海外での最新研究動向を紹介できたこと、『日本美術年鑑』において近年の動向をきちんとまとめて報告した点が評価される。②独創性においては、『美術研究』434 号の田中潤論文で大礼と儀式に必要となる装束の歴史関係について報告した点、435 号江村知子論文で新出資料を報告できたことなどが上げられる。③発展性においては、『保存科学』が冊子体とあわせて機関レポジトリから公開されており、国内外から盛んに利活用されている点が評価できる。④効率性においては、『保存科学』が年内論文を受け付けているが投稿から査読を経て発刊までを約 3 か月の短期間で行い、一般的な学術雑誌と比べても迅速に成果公開がなされている点が評価できる。⑤継続性については、『美術研究』は昭和 7 年以来、『日本美術年鑑』は昭和 11 年以来続けてきた刊行を、元年度版も継続実施した点が評価される。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	B	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** ・日本美術年鑑　1 点（①） ・美術研究　3 点（②）	定量評価 ―

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由及び今後の見通し	中期計画初年目となる 3 年度も所期の計画通り、各研究プロジェクトの研究成果を反映させた定期刊行物を刊行することができた。4 年度以降も、学術誌としての一定の水準を保ちながら、また当研究所の事業内容を一般に広報する上でも有益な内容の報告書となるよう今後とも努める予定である。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2421F

中期計画の項目	(4)-②-1)2)3)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)2)3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1)定期刊行物の刊行　2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 3)ウェブサイトの充実
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○井関信雄（連携推進課長）、田島章雅（連携推進課課長補佐）、桑原隆佳（連携推進課広報企画係長）、渡　勝弥（連携推進課）ほか	

【年度実績と成果】

1) 定期刊行物の刊行
・奈良文化財研究所概要 2021　11 月刊行、2,000 部　・奈良文化財研究所紀要 2021　7 月刊行、2,600 部
・奈文研ニュース「No.81」6 月,「No.82」9 月,「No.83」12 月,「No.84」3 月,各 2,200 部
・埋蔵文化財ニュース「No.186」11 月 1,900 部
2) 現地説明会等
・10 月 2 日藤原宮大極殿院の発掘調査(飛鳥藤原第 208 次)現地見学会　於　橿原市醍醐町（参加者 619 人）
・10 月 9 日興福寺東金堂院の門と回廊の発掘調査(平城第 640 次）現地見学会 於　奈良市登大路町(参加者 949 人)
3) 講演会
・第 126 回公開講演会　演題：「古代の人形を読み解く」「都市ヨークにおける初期中世装飾石彫の製作」　講演者：浦、岩永
新型コロナウイルス感染拡大防止のため平城宮跡資料館講堂での定期講演をとりやめ、なぶんけんチャンネルで 6 月 25 日～6 月 28 日の間配信した。(視聴数：976 件)
・第 13 回東京講演会　開催日：10 月 23 日　於　有楽町朝日ホール
タイトル「特別史跡山田寺跡－史跡指定 100 年－」　講演者：内田、清野、箱崎、林、西田、本中
実地での開催に加え、ライブ配信用の特設サイトを設け講演会をリアルタイムで配信した。(来場者数 135 人,オンライン参加者数 358 人)
・第 127 回公開講演会　開催日：11 月 13 日　於　平城宮跡資料館講堂
演題：「神々の住まいの内装－石清水八幡宮本殿の室礼（しつらい）について」、「どうして古墳の副葬品は現代まで残るのか？－模擬古墳による金属製品の腐食メカニズムの検討」　講演者：山崎、柳田（来場者数 84 人）
実地での開催に加え、なぶんけんチャンネルにて講演会を配信した。(視聴数：1,310 件)
4) シンポジウム
・12 月 17 日～18 日　第 25 回古代官衙・集落研究集会「古代集落の構造と変遷 2」(古代集落を考える 2)（参加者 125 人）
・4 年 2 月 5 日～6 日　第 21 回古代瓦研究会シンポジウム（参加者 165 人）
5) ウェブサイトの充実
・なぶんけんチャンネルを開設以来、年に十数本の動画を公開し、すでに 91 本の動画を公開するに至った。巡訪研究室、コラム作寶樓も引き続き公開した。(視聴数（オンライン）：101,353 件)

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性については、調査研究成果を適時に刊行し、現地説明会開催、講演会開催の情報についてウェブサイト上に公開し情報発信を行った。②独創性については、調査研究内容の新規性及び卓越性を持たせ発信することができた。③発展性については、個々のデータベース登録数も増え、多様なブログ、コラム等を更新することによりウェブサイトの内容を充実させた。また、当平城宮跡資料館の展示物を多元的に発信するために、ウェブサイト上に奈良文化財研究所収蔵品データベースを開設した。④継続性については、定期刊行物、講演会、ウェブサイト公開など従来から継続的に実施し、恒久的な提供が認められる。講演会等は、第 126 回公開講演会については、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から開催方法をなぶんけんチャンネルによる配信に変更し、コロナ禍における新たな研究成果の発信に取り組むことができた。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) ・定期刊行物等の刊行件数　7 件　・講演会等の開催回数　7 回 ・講演会等の来場者数　2,145 人 ・学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数　7,454 件	－

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	定期刊行物及びウェブサイトにおいては調査研究の成果等を公表するものとして、計画通り順調に刊行や更新ができた。また第 126 回公開講演会については、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から開催方法をなぶんけんチャンネルによる配信に変更し、コロナ禍における新たな研究成果の発信に取り組むことができた。以上を含めて、今中期計画期間の初年度として、2 年度目以降の今中期計画遂行における基盤となる事業を実施できたと判断し、Ｂと評価した。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2422E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	オープンレクチャー（調査･研究成果の公開）	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、小野真由美（主任研究員）、吉田暁子（研究員）ほか	

【年度実績と成果】

○11 月 5 日、一般から聴講者を募集し、オープンレクチャーを開催した。中期計画初年度にあたり、大テーマを新たに「かたちを見る、 かたちを読む」とし、新型コロナウイルスの感染防止を考慮し、内部講師 2 名による 1 日の開催としたほか、聴講者定員を抽選制として絞って行った。

○当研究所・文化財情報資料部より 2 名の講演を行った。講演テーマは次の通りである。

・文化財情報資料部日本東洋美術史研究室長・小林達朗「皆金色阿弥陀絵 像の出現とその意味―転換期の時代思潮の表象」

・主任研究員・安永拓世「香川・妙法寺の与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」―画像資料を活用した復原的研究―」

○外部からの聴講者 34 人を得た。

オープンレクチャーの様子

年度計画評価	B

【評定理由】

①適時性、④効率性においては、感染防止の観点から、定員を絞って抽選制とし、検温や消毒などの防止策を徹底した。結果、定員の 4 倍近くの応募があったが、34 人の参加をみた。参加者からのアンケート結果では、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせて 85%の回答を得ることができ、時宜に適った講演テーマにて実施できた。②独自性においては、未発表の最新の研究成果を、新知見を織り交ぜて公開することができた。③発展性においては、いずれの講演も今後の調査研究による進展が期待されるものであり、そうした発展的成果を公開することができた。⑤継続性においては、研究所において長年継続して開催しているものであり、継続性を有しているといえる。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 ・講演会の開催回数　1 回	定量評価 ―

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	今中期計画初年度にあたるプロジェクト事業を達成できた。3 年度はオープンレクチャーの新たなテーマとして「かたちを見る、 かたちを読む」とし、所員 2 人による発表は、造形美術にまつわる様々な要素をひもときながらその真の姿に迫るというテーマに則した内容で、参加者からも好評を得た。2 年度同様、コロナ対策も十全に行い、無事に終えることができた。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2431F

中期計画の項目	(4)-③-1)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。 1)特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○加藤真二（企画調整部展示企画室長～6 月 30 日）○岩戸 晶子（同　7 月 1 日～）、○石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）ほか	

【年度実績と成果】

(1) 平城宮跡資料館

・春特別企画展第一部「平城宮跡保存運動のさきがけ－大極殿標木建設式 120 周年－」
　(4 月 29 日～6 月 27 日)（9 日間（※）、688 人）。関連動画 1 本配信。
・春特別企画展第二部「大地鳴動－大地の知らせる危機と私たちの生活－」
　(4 月 29 日～6 月 27 日)（9 日間（※）、688 人）。
・夏企画展「奈良を測る－森蘊の庭園研究と作庭－」
　(8 月 7 日～9 月 12 日）32 日間・1,157 人）関連動画 2 本配信。
・秋特別展「地下の正倉院展－木簡を科学するⅡ－」
　(10 月 9 日～11 月 7 日)（26 日間・6,310 人）。関連動画 1 本配信。
・冬企画展「発掘された平城 2020・2021」(4 年 2 月 11 日～3 月 27 日)（45 日間・　4,167 人）

平城「奈良を測る」展

(2) 飛鳥資料館

・ミニ展示「新収蔵品紹介－「呉」と書かれた瓦」(4 月 23 日～5 月 1 日)（8 日間（※）・535 人）。
・夏企画展「第 12 回写真コンテスト作品展　「飛鳥の木」」
　(7 月 16 日～9 月 12 日)（51 日間・2,112 人）応募 160 点。
・秋特別展「屋根を彩る草花－飛鳥の軒瓦とその文様」
　(10 月 15 日～12 月 19 日)（57 日間・7,353 人）。
・冬企画展「飛鳥の考古学 2021」(4 年 1 月 21 日～3 月 13 日)（45 日間・2,588 人）
（※）両資料館とも新型コロナウイルス対策のため 5 月 2 日～6 月 20 日を臨時休館とした。

飛鳥「屋根を彩る草花」展

(3) 藤原宮跡資料室

・常設展示に加え、ロビーにて「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 205 次)」、「石神遺跡 SD1347・1476 出土土器（石神遺跡第 8・9 次)」(10 月 1 日～3 月 31 日）を実施。
※新型コロナウイルス対策のため、5 月 1 日～6 月 20 日を臨時休館とした。

年度計画評価	A

【評定理由】

①適時性では、平城宮跡資料館にて平城宮跡の保存のきっかけともなった大極殿標木建設式 120 周年にあわせ、初期の平城宮跡の保存運動を紹介した。これは 4 年度の平城宮跡史跡指定 100 周年関連企画のプロローグでもある。②独創性では、飛鳥資料館の「屋根を彩る草花－飛鳥の軒瓦とその文様」は、飛鳥時代を特徴づける瓦のさまざまな文様とそのルーツ・変遷に迫る内容であり、飛鳥資料館ならではの企画であった。会場の造作も好評であった。③発展性では、平城宮跡資料館の展示に関する動画を 4 本作成し、動画配信サイト「なぶんけんチャンネル」にて配信し、今後の展示活動への動画の活用について礎を構築することができた。④継続性においては、各館の特別展・企画展は、ほぼ定期で継続的に実施するが、毎回新たな内容で行っている。平城宮跡資料館の「地下の正倉院展」は 15 回、『発掘された平城』は平成 13 年から継続的に開催している。飛鳥資料館の「写真コンテスト」は 12 回を数え、「飛鳥の考古学」は平成 18 年度以来継続して開催している。定量評価は、平城宮跡資料館では、特別展・企画展満足度アンケート 90%、飛鳥資料館では、83.7%であった。以上から、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	B	A	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
(1) 平城宮跡資料館　特別展・企画展満足度アンケート 85% (2) 飛鳥資料館　特別展・企画展満足度アンケート 85%	(実績値)　(1)平城宮跡資料館特別展・企画展満足度アンケート　90% (2)飛鳥資料館特別展・企画展満足度アンケート　83.7% (参考値)　(1)平城宮跡資料館　入館者数 25,264 人、開催日数 265 日 刊行物等発行実績　3 件（ア～ウ)、特別展・企画展など 5 回 (2)飛鳥資料館　入館者数 17,363 人、開館日数 263 日、 刊行物等発行実績　2 件（エ、オ)、特別展・企画展など 4 回 (3)藤原宮跡資料室　入館者数 5,226 人、開館日数 308 日	B

ア『森蘊の世界－奈良・平安の庭を求めて－」(『奈良を測る－森蘊の庭園研究と作庭－』展図録　変形サイズ 198×220 フルカラー 60 ページ 6 月 30 日発行)
イ『地下の正倉院展－木簡を科学するⅡ－』(A4 判フルカラー 16 ページ 10 月 9 日発行)
ウ『発掘された平城－2020･2021－』(A4 判フルカラー 8 ページ　2 月 11 日発行)
エ飛鳥資料館図録第 74 冊『屋根を彩る草花－飛鳥の軒瓦とその文様』(A4 判フルカラー76 ページ　10 月 15 日発行)
オ飛鳥資料館カタログ第 38 冊『飛鳥の考古学 2021』(A4 判フルカラー28 ページ　1 月 21 日発行)

中期計画評価	A
中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、「新しい生活様式」を踏まえつつ、解説ボランティアを育成し、その活動を支援する。
評定理由	新型コロナウイルス対策のための臨時休館、入館者数の減少などがあるが、年度内に 4～5 回の特別展、企画展を実施するなど、中期計画初年度の 3 年度においても研究成果の公開施設の役割を果たした。また、ウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進し、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が 88%であった。このため、事業は順調に推移していると判断し、A 評価とした。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2432F

中期計画の項目	(4)-③-2)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。 2)定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○井関信雄（連携推進課長）、田島章雅（連携推進課課長補佐）、桑原隆佳（連携推進課広報企画係長）、岩井靖子（連携推進課事務補佐員）	

【年度実績と成果】

1) 解説ボランティアに関する会議

・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務部が一体となったボランティア活動を検討する会議、毎月１回、計 11 回開催）

・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と当研究所職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月１回、計 11 回開催）

・平城宮跡歴史公園ガイド連絡協議会（NPO 法人平城宮跡サポートネットワーク、奈良県（平城京 再生プロジェクト）、国交省（平城宮跡管理センター）、当研究所の４者で行う国営飛鳥歴史公園内のボランティア活動等の情報共有、意見交換を行う会議：２か月に１回、計６回開催）

2) 平城宮跡解説ボランティア活動再開に向けての準備

・新型コロナウイルス感染拡大防止のため平城宮跡解説ボランティア活動を中止していたが、9 月 14 日開催の平城宮跡解説ボランティア懇談会において自治体の方針・要請を踏まえた活動再開の目安を具体的に定めた。その定めた再開目安の各条件を満たしたことにより、4 年 4 月活動再開に向けて、ボランティア各自の活動継続の意向調査を行い、結果 129 人のボランティア活動継続希望者があり、継続希望者に対して活動再開に向けて研修の準備を行った。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性については、解説ボランティアへの当研究所からの最新の情報提供、解説ボランティアからの改善等の意見を随時取り入れるための研究部と事務部が一体となって組織した「平城宮跡解説ボランティア懇談会」を定期的に開催し、ボランティア活動再開に向けて「平城宮跡解説ボランティア活動再開目安」を策定した。②独創性については、2 年度の当研究所の研究成果を記載している「奈良文化財研究所紀要 2021」を全ボランティアに送付し、解説ボランティアの資質向上を図った。③発展性については、ボランティア懇談会において解説ボランティアからの意見を随時取り入れるようにすることにより、活動の活性化や運用改善が進められた。④継続性については、ボランティア連絡会議を定期的に開催し、ボランティアとの意思疎通を引続き行った。また、平城宮跡解説ボランティア懇談会において定めた再開目安の各条件を満たしたことにより、4 年 4 月活動再開に向けて、ボランティア各自の活動継続の意向調査を行い、129 人のボランティア活動の継続希望者があり、継続希望者に対して活動再開に向けた研修を行い活動が順調に進んでいると判断した。なお、3 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から解説ボランティアが実際に解説活動を行うことは叶わなかったが、新型コロナウイルス収束後の活動再開を見据え、必要と考えられる対応策は全て実施したところであり、所期の目標を達成したと考える。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・解説ボランティア登録人数：129 人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：0 人 ・解説活動日数：0 日	定量評価 －

中期計画評価	B
中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、「新しい生活様式」を踏まえつつ、解説ボランティアを育成し、その活動を支援する。
評定理由	3 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のために解説ボランティアの活動自体を休止し、併せて対面での研修や会議の開催は見送ったが、活動再開に向けての目安を定め、ボランティア連絡会議を開催し、継続的にボランティアの育成と意思疎通を図るなど、中期計画の初年度として、必要な対応を講じることができた。以上を含めて、事業を順調に進められていると判断し、B評価とした。